文　化　財　学　習　会

ふ　る　さ　と　探　訪

テーマ　ガソリンカー廃線跡　遺構を尋ねる②

（中村トンネル～第一香東川橋梁跡橋脚）

日　時　　令和５年６月２５日（日）

講　師　　村山　淳（一般社団法人トピカ　代表理事）

共　催　　高松市文化財保護協会・高松市教育委員会

資　料　　塩江町歴史資料館　提供

ガソリンカー廃線跡　遺構を訪ねる【第2回】

中村トンネル⇩第一香東川橋梁跡橋脚（約 4.4 ㎞）

明治末期に宇高航路が開設されて、四国の玄関高松に人が集まるようになると、高松と門前町琴平を短絡する鉄道建設の機運が高まり、県内の有力者大西虎之介や、景山甚右衛門らが中心となって同区間に四国初の本格的高速電車として瓦町～琴平間を昭和二年（一九二七）全線開通した。

翌年、琴平電鉄は阿讃国境と塩江温泉郷開発のアクセスのため、昭和三年（一九二八）八月二十一日に塩江温泉鉄道（株）を設立し鉄道の敷設を開始した。着工後昭和四年（一九二九）十一月十二日に仏生山～塩江間（十六．一㎞）を開業した。社長は琴平電鉄の社長である大西虎之介が兼務した。この鉄道は非電化の鉄道では唯一広軌を採用した内燃鉄道であった。琴平電鉄が広軌であったため、琴平電鉄からの貸車直通を念頭においてであったが直通運転は実現されなかった。開業に合わせて新造された車両五輌は川崎車輌が手がけた初のガソリンカーであった。以後廃線までこの五輌のみで営業された。

塩江温泉では、琴平電鉄が塩江温泉（株）を設立し、演芸場付きの温泉旅館を経営した。専属の少女歌劇団を養成して「四国の宝塚」として売り出し、定期的に催物を企画して運賃割引を行うなど積極的に営業活動を行なった。しかし当時の経済不況もあり経営は苦しく塩江温泉鉄道は昭和十三年（一九三八）七月六日付けで琴平電鉄に吸収合併され、琴平電鉄塩江線となった。

しかし、琴平電鉄に吸収された後も営業好転の目途がたたず、燃料であるガソリンの統制が厳しくなるなど営業がますます困難となり、塩江線は開業からわずか十二年後の昭和十六年（一九四一）五月十日に廃止された。廃止後、レール等の鉄道施設は台湾製糖株式会社に売却された。車両は満州に渡り、新京（現在の長春）市電となった。

ガソリンカーは昭和三年（一九二八）川崎車輌製の半鋼製片ボギー式ガソリンカーで、自重六．五トン、定員四十名、米国アンドリュース・アンド・ジョージ社製三十八馬力ガソリン機関を搭載、長さ八メートル強、幅二．五メートル強、片側二ドア。ガソリンカーとしては前進・後進のできる最初の車両であったという。総工費は七十五万円。延長十哩一分（じゅうまいるいちぶ＝16.093443 キロメートル）である。

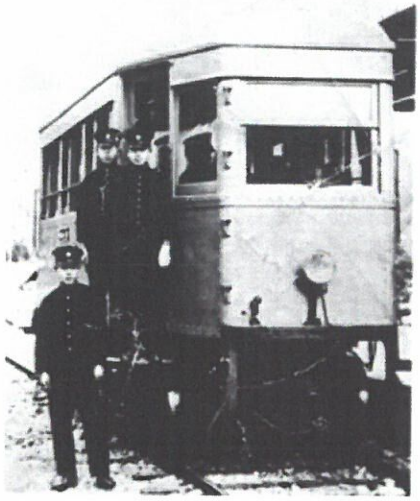
鉄道賃金は、区間制度にして一区五銭。仏生山～塩江間を十区に分けられてあるが、二区以上は一区四銭の割合で、仏生山～塩江までは四十銭であった。

廃止後八十年となる現在でも、各地に廃線跡遺構が残っている。仏生山駅から香川町浅野にかけては市道となっており当時の面影はないが、路線がガソリンカーであったため「ガソリン道」として親しまれている。香川町浅野から塩江町安原下までは、香東川自転車道となっており、多くのトンネルや橋脚などの遺構が残っている。

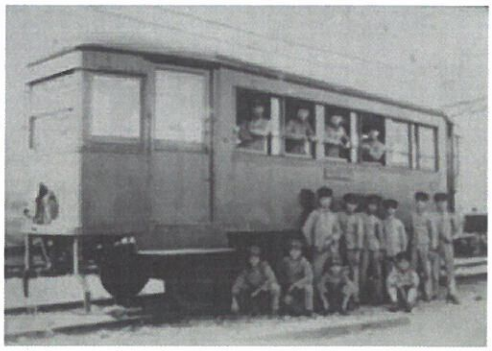
路線営業距離は十六・一㎞。駅数は、仏生山・船岡・浅野・伽羅土・川東・岩崎・鮎滝・関・安原・中村・岩部・塩江の十二駅であった。開業直後の一九三〇年の時刻表は、仏生山発午前五：十四～午後九：五十四、塩江発午前六：〇四～午後一〇：四十四で、一日二十一往復、五十分ごとに運転されていたが、その後二十五分ごとにし、ことでん全電車に接続もされたがあまりサービスの効果もなく、合併後再び五十分ごとに変更された。一九三〇年度が最高の輸送実績でその後は年々低下していった。一九三〇年当時の全線所要時間四十二分、運賃四十銭、ガソリンカーでほとんど一輌での運転であった。

塩江温泉鉄道の乗組員とガソリンカー

昭和５年　塩江駅での運転手・車掌とガソリンカー



通学の学生たち



第四香東川橋梁　鉄橋を走るガソリンカー

鉄道建設に伴って沿線開発と旅客誘致のため、昭和三年十一月二十六日に塩江温泉（株）が設立され、旅館「花屋」直営の「温泉館」が花屋の東隣に開業した。塩江温泉鉄道の開通と同じ日に開業した。

この建物は二階建てで、一階に浴室・休憩室・売店・遊戯場・理髪室などがあり、二階には演芸場が造られ、専属の少女歌劇が年中無休で数年間開演された。「四国の宝塚」として人気を集めていた。

その後、昭和十五年少女歌劇は消え、昭和十八年花屋は幕を閉じた。同年八月二日、県の管轄となった花屋は「健民修練所」として体質の弱い青年を集め修練が行われていた。昭和二十一年花屋旅館を復活し塩江温泉の伝統を活かして観光による塩江の発展を図り観光客は次第に多くなった。その後温泉館は、昭和二十五年頃取り壊される。そして、昭和四十九年、花屋は休業中の失火によって焼失し、一世を風靡した旅館「花屋」は幕を閉じた。

ガソリンカーは、通称「ガソリン」と呼ばれ、またマッチ箱ともいわれ、ガッタタンガッタタンと豪快な音を響かせて走っていたという。一車輌の定員は四十人乗りだが、菊人形などが行われる観光シーズンには一〇〇人近く乗ることもあった。学生定期は五割引きでいずれも六ヶ月定期として発行していた。主に、朝は高中(現高松高校)や高商、香川高校(現高松南高校)に通う学生たちで満席だった。一車線のため、上りと下りの交替する場所が必要であり、鮎滝で行っていた。四輌を使用するときには、運行回数が多いので浅野や中村でも交替をしていた。 普通四人が運転業務にあたっていて、三往復運転すれば一往復分休憩するというようになっていた。運転台は車輌の前後にあった。エンジンの調子が悪く、日によっては二～三回発車の時にエンジンがかからないということもあった。そんなときには、お客に頼んで数人で押してもらったりした。また上り坂の時にはいったん下り坂の方へ押してエンジンをかけ、再び上り坂の方へ進行したりもした。ワイパーも手動で、雨の日には片手で操縦しながら同時にワイパーも動かしていた。

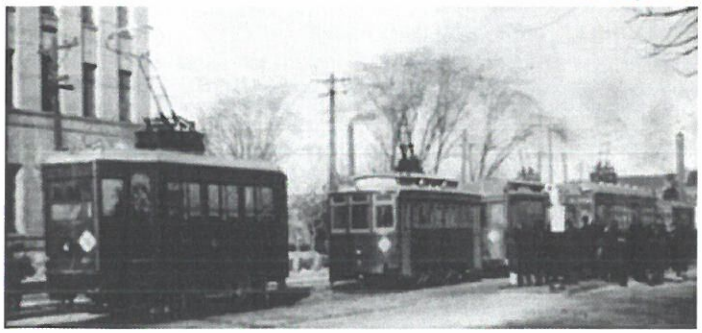
レール等の鉄道施設は台湾製糖株式会社に売却された。車輌のガソリンカーは満州に渡り、一部改造され新京(現在の長春)の市電として使用された。

新京を走る市街電車(　昭和十八年一月)

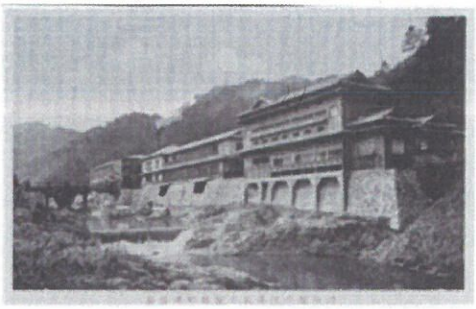
塩江温泉鉄道のガソリンカーは左端の 41 号車。その右は、もと大阪市電。

三両目以降右端までは大連から譲り受けた電車。

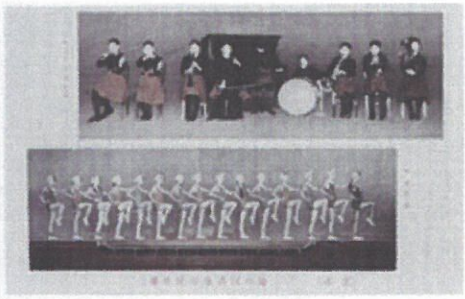
鉄道ファン　昭和六十一年(1986)七月号より



料理旅館　花屋

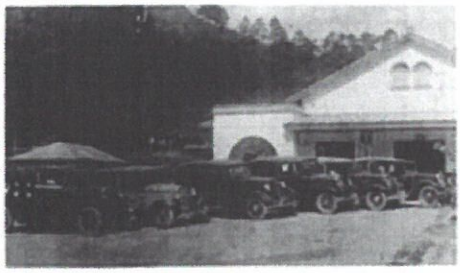


花屋専属の少女歌劇と少女ジャズバンド



昭和 10 年頃　塩江駅とハイヤー(フォード型)

ハイヤー料金は、塩江地区内～三十銭均一。「虹の滝」往復は、待ち時間込み二円であった。



写真中央の建物が「塩江駅」

◆参考資料①

昭和五年七月一日～十二月三十一日　半期営業報告書　運輸成績表

営業日数　一八四日

走行距離　一〇四四三五里八分（約四一七七四三キロメートル）

乗客人員　一五八八七六人　一ヶ月～約二六四七九人

一日平均～八六四人

◆参考資料②

昭和十一年当時は、米一俵が十一円八十銭。うどん一杯・油揚げ五枚が五銭。

ほかに三越の「うな重」は五十銭していたという。

☆ガソリンカー復元プロジェクトについて

二〇十八年度に塩江町地域おこし協力隊員と若い人たちが中心となって、興味ある人は誰でも参加できるという「ガソリンカー復元プロジェクト」がスタートした。

当初香川高等専門学校の学生有志五人が参加し、ガソリンカーの模型を作成する「模型班」と、廃線跡の遺構を散策するためのガイドマップを作成する「マップ班」に分かれて行動を開始した。

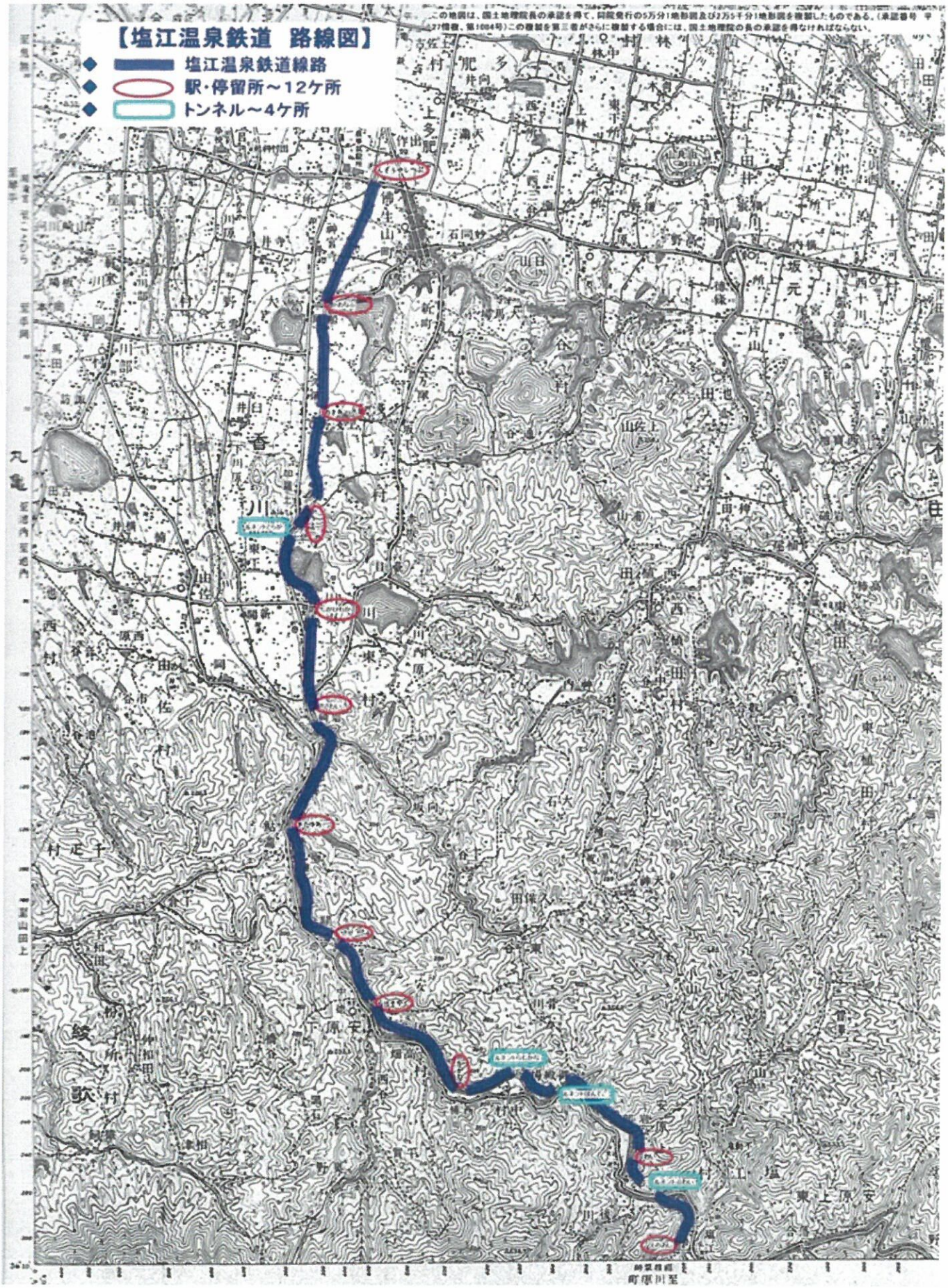
模型班は二〇十八年度中に「ガソリンカーの模型の作成」をする目標だったが、ガソリンカーの図面がない。廃線後七十七年も経た現在まで図面の存在は知っている者がいなかった。調査の結果、埼玉県の鉄道博物館に設計図らしきものがあるということがわかった。早速、高専生が現地に飛び写真撮影をし、当時のガソリンカー製造元である川崎重工に問い合わせ、正式な発見となる。

まずは、香川大学の先生方に協力を依頼し 3D モデルを完成させた。さらに、当時の図面を元に香川大学創造工学部の学生たちによって新たに復元図面が作成された。また、マップ班は日本語版と英語版の二種類のガイドマップを作成し無料配布している。

そして、二〇十九年度には、木製の骨組みで原寸大アート作品を完成させ八月に塩江美術館の企画展で展示された。ガソリンカーの窓には塩江中学生が塩江町の風景を描いた「ちぎり絵」の作品を描いた。

二〇二一年度は塩江温泉鉄道の「1/80 サイズのジオラマ」を完成させた。ガソリンカー実物大の車内部分の一部を製作し、「つり革」も取り付けた。

今後は実物大車両模型の恒常展示できる設置場所を探し公開することを検討している。


【塩江温泉鉄道　路線図】
塩江温泉鉄道線路
駅・停留所～12ケ所
トンネル～4ケ所

◆近隣の見どころ◆

☆河北八幡神社　塩江町中村　　祭神　応神天皇ほか九柱

拝殿正面に「父母孝」と書かれた扁額が掲げられている。住民には「古宮」とか「古宮神社」と呼ばれ親しまれている。「河北神社之記」の碑文によると、本社は天徳元年(九五七)の創立で、祭神は八幡大神にして安原山鎮護の宮祀たりしと伝わる。いつのころからか古宮と称されている。

故尾形磯吉翁が天保十二年(一八四一)に本殿を再建した。去る年、日清の役には石灯籠を。日露の役には注連柱を建設して翁の素志を継承した。明治三十九年(一九〇六)神社合併に関する勅令の発布がありこれを動機として四十三、四両年にこの里の所々に祀れる小社を合祀した。のち、里人が社殿の修築をし、お庭を開き樟や檜を植えたとある。立派な反りのある石垣は、町内の青木姓の人々(農業と石工を生業)が中心に築いたと伝えられている。

☆旧安原保育所

安原幼稚園は、昭和二十八年七月一日安原小学校内に安原村立として開設された。園長は安原小学校長が兼務し二学級であった。昭和三十一年十月一日町村合併の時、浦山、下倉、及び鮎滝地区の一部が香川町へ編入されたため園児数が二十六人となり、安原保育所との話し合いにより一年保育となった。平成二年、時代の要請で休園の形で安原保育所に収容して保育することとなった。

安原保育所は昭和六十一年二月二十二日落成し、動物をモチーフとした外壁のモダンな建物であった。

☆萩の寺　福寿山来迎院　最明寺

文武天皇の大宝元年(七〇一)に僧行基菩薩がこの地に来られ、薬師如来の本尊を刻んで安置し如意輪寺と称した。その後、嵯峨天皇の弘仁十二年(八二一)に弘法大師が当山に立ち寄り千手観音を刻んで安置した。文応元年(一二六〇)に鎌倉最明寺入道北条時頼が諸国行脚の折、当山に立ち寄り一国一跡の伽藍を建立し鎌倉御祈願所と定め、寺名を福寿山来迎院最明寺と改めた。その時代には七堂伽藍が軒を並べ末寺十三ケ寺を従えて法益日々に新たなる有様だったが、天正十三年(一五八五)土佐長宗我部元親の兵火にあった。明治年間に再び火災にあい音川の地に仮に再建し、仮の本堂が現在に至っている。

萩は、第四十一世明圓が晋山当時、境内の一隅に宮城野と称する萩が一株あってそれを年続的に株分け移植し、今では境内いっぱいに咲き誇り萩の名所となっている。

【最明寺の釣鐘】

南無大師遍照金剛　第四十一世明圓　昭和二十一年十二月起工

安原上東椛川地区の「椛川たたら組」によってたたらが踏まれた。これが「椛川たたら組」の最後のたたら踏みとなった。

【讃岐十景】

安原最明寺　昭和二年十一月二十日　香川新報社の「讃岐十景」に選定されている。

☆松平頼重公別荘屋敷跡

頼重公の別荘で塩江では他に岩部にもあった。音川の別荘は、夏季避暑用のもので、時に川魚を捕るためにも使っている。早くは寛永十九年七月二十二日と八月三日にここに来ている。英公日暦に「七月二十二日香東川へお出でなさられ、道にて鳥三つ鉄砲にて遊ばされ、それより香東川にて鮎お捕り。音川まで御座なさられ、夜五つ(午後八時ころ)お帰り、ご殺生の鮎七百程なり」と書かれている。最明寺の百メートル余り北方一段高い平地でうしろに山を負い、東西約七十メートル、南北は西の方で十メートル、東の方で三十メートルの地と思われる。北方の山際に幅二メートル長さ十五メートルほどの堀が残っている。また、屋敷跡の石垣も一部残されている。寛文四年に一回、同六年と八年には二回づつ、同十年八月にも来泊している。

〈松平頼重公別荘屋敷跡と石垣の一部〉

☆音川城跡

音川城は、標高二百六十メートルの小山の頂部に築かれていた。阿波との山越えルートの一つである街道を見通す位置に築かれている。この城は非常に小さいが主郭を半周する横堀が構築され、香川県では貴重な存在である。川田信濃守景信の城で曲輪、堀、土塁が残されている。

☆関城跡

『古今讃岐名勝図絵』に長宗我部元親が攻めてきた際、守りとして関を構えたとある。現在、『関(せき)』という地名が残る地点は、川まで小尾根が突き出て川を狭め、また見通しをさえぎっている。西は新しい切り通しで、かつては尾根裾をまいて川沿いに街道が通っていた。対岸にそびえる音川城との呼応という点でも城を築くには好適の地である。尾根は畑と墓地になっているが段状で本来曲輪であったものが含まれている可能性がある。

☆関所跡

寛永十年(一六三三)の讃岐国絵図には、百相村-鮎滝-中村-内場-相栗超えのルート(安原往還)が高松城下と国境を結ぶ路線としてすでに存在していた。阿波藩にとってもこの道筋は讃岐と阿波を結ぶ重要な道であったことがわかる。そのため、この道は物資の流通と共に人々の往来が多かったことがうかがえる。阿波へは塩や魚介類が、阿波からは薪炭、木地、藍玉が選ばれ交易が行われていた。このように重要な道筋の安原下に関所を設けて通行人や各種産物、関所手形などを有力な郷士が検査や監視をしていた。安原往還は経済的ではなく、法然寺への参詣道という宗教的な意味もあった。関という地名もここからきているものと思われる。